熊阪台州の文章論から見た『含餳紀事』について

土屋　聡

一、熊阪台州と『含餳紀事』

熊阪台州（名は邦。一七三九～一八〇三）は、奥州伊達郡高子村（現在の福島県伊達市）の人である。入江南溟（一六八二～一七六九）、松崎観海（一七二五～一七七六）に師事した徂徠学派の文人・学者とされている。[1]

その著作である『含餳紀事』は、所謂「花咲か爺さん」、「猿蟹合戦」、「桃太郎」三篇の物語を収めた漢訳童話集である。[2] この書は戯作ともされるが、その成立の経緯（次節）を見ると、門人への作文教育を意識して制作されたようである。したがって、この書には、文章とは如何にあるべきか、という彼の文章論が少なからず反映されていると予想される。従来の研究では、特に「桃太郎」の漢訳「紀桃奴事」を中心として、江戸期の「桃太郎」関連文献や台州が取材したであろう漢籍との関係から、その特色が明らかにされてきた。[3] しかし、台州の文章論そのものと結びつけた研究は、未だ充分とは言えない。

そこで、本稿では台州の『白雲館文罫』[4]『文章緒論』[5]における文章論の内容を確認した上で、それが『含餳紀事』にどのように反映されているかを明らかにしたい。

二、『含餳紀事』制作の経緯

『含餳紀事』が制作された経緯について、宮田金峯（一七一八～一七八三）「含餳紀事序」及び台州自身の『白雲館文罫』所収「三子紀事序」に拠って見てみよう。

「含餳紀事序」には、簡潔に「本邦民間有語幼童之話。熊阪子彦臥病数月、無聊已甚、強使門人説鬼（本邦民間に幼童に語るの話有り。熊阪子彦 病に臥せること数月、無聊 已に甚しく、強ひて門人をして鬼を説かしむ）」とある。病床にあった台州は、暇をもてあまして門人に「鬼」を「説く」ように強いた。「三子紀事序」に拠れば、その門人とは高木忠卿、高木元彝、小野君翔の三名であったという。

於是乎忠卿先説翁嫗事、元彝次説蟹猿事、君翔最後説桃児事。此蓋皆古来民間所伝、而髫齔児女所喜聞云

爾。

是に於てか 忠卿 先づ翁嫗の事を説き、元彝 次に蟹猿の事を説き、君翔 最後に桃児の事を説く。此れ蓋し皆な古来民間の伝ふる所にして、髫齔の児女の喜びて聞く所と爾か云ふ。（「三子紀事序」）

彼らの語ったものが、「花咲か爺さん（翁嫗事）」、「猿蟹合戦（蟹猿事）」、「桃太郎（桃児事）」である。さらに台州は、日を決めて三話を文章化して持ち寄ることを提案する。

「……乃欲与諸子刻日、戯紀翁嫗及蟹猿桃児事、可乎」。皆曰、「可哉」。遂刻日而去。余則先期三日、各紀其事成篇、名為含餳紀事、蔵諸巾笥。至期則三子者各袖其文来。余取而観之、皆未得文理、彼善於此則有之矣。余乃語三子者曰、「凡作文之法、欲先得文理。文理既得、始可成篇……」。

「……乃ち諸子と日を刻して、戯れに翁嫗及び蟹猿・桃児の事を紀さんと欲す、可ならんか」と。皆な曰はく、「可なるかな」と。遂に日を刻して去る。余れは則ち期に先んずること三日、各おの其の事を紀して篇を成し、名づけて『含餳紀事』と為し、これを巾笥に蔵む。期に至れば則ち三子者 各おの其の文を袖にして来たる。余れ取りてこれを観るに、皆な未だ文理を得ず、彼れ 此れより善きことは則ちこれ有り。余れ乃ち三子者に語りて曰はく、「凡そ作文の法、先づ文理を得んと欲す。文理 既に得て、始めて篇を成すべし……」と。（「三子紀事序」）

台州は、期日よりも前に三篇の文章を完成させていた。これが『含餳紀事』である。彼はこの試みを「戯れ」とはしているが、多分に作文教育の側面があったことは否めない。それは、門人たちの文章を「未だ文理を得ず」として、理想的な文章についての講義が始まることから明らかである。この後、台州は、門人の文章を添削して『三子紀事』としてまとめ、自ら序を撰した。

以上の経緯からすれば、『含餳紀事』とは、門人に説いた理想的文章の水準に達した書であったと考えられる。なお、『含餳紀事』の宮田金峯「序」には「天明改元夏五月」とあり、同書が天明元年すなわち一七八一年までに成立したものであることが判る。

三、台州の文章論

門人たちが持ち寄った文章に対して、台州は「未だ文理を得ず」と批判している。また、彼は「凡そ作文の法、先づ文理を得んと欲す。文理 既に得て、始めて篇を成すべし」と語っている。このような発言からすると、「文理」というものが台州の文章論の基礎になっていると考えられる。

「文理」という語は、もともとは荻生徂徠（一六六六～一七二八）が使用していた術語である。

文理と云ふは 畢竟 字の上下の置きやうなり。……たとへば石山と云へば山が体になりて石は苗字になるなり。山石と云へば石が体になりて山は苗字なり。

（『訓訳示蒙』巻一）[6]

とあるように、「文理」とは語順によって語の働きが変わることを指す。[7] 台州も、その著『白雲館文罫』の中で、このような語の「上下」を文章の基礎として重視している。

雖亦堇堇乎小冊子哉、観者能玩味其虚実死活上下位置之法、引而伸之、触類而長之、則於文章之道、思過半矣。蓋亦挙一隅之意也。

亦た堇堇乎たる小冊子と雖も、観る者 能く其の虚実死活・上下位置の法を玩味し、引きてこれを伸べ、類に触れてこれを長ぜば、則ち文章の道に於ける、思ひ半ばに過ぎん。蓋し亦た一隅を挙ぐるの意なり。

（『白雲館文罫』自序）

そもそも彼の『白雲館文罫』は、徂徠の作文の秘訣を記したとされる『文罫』の名を襲ったものであり、台州が徂徠と同様のことを述べているのは、さして異とするに足りない。しかし、台州はそのことを「上下位置之法」と称しているが、これを「文理」とは称していないのである。

ここで、太宰春台（一六八〇～一七四七）に目を転じてみると、彼は「文理」という語を、徂徠とはまた異なる意味で使用している。[8]

春台もまた徂徠門下の人であるが、彼は、徂徠が尊崇した明の古文辞派に対して、批判的立場を取る。

行古辞以今法者有之矣。其病在好用古人成語。夫古人之語必有所以出之。今修辞家、但用古人成語、而不問其所以。故辞雖典雅、而文理不属。

古辞を行ふに今法を以てする者これ有り。其の病古人の成語を用いることを好むに在り。夫れ古人の語 必ずこれを出だす所以有り。今の修辞家、但だ古人の成語を用いて、其の所以を問はず。故に 辞典雅なりと雖も、而も 文理 属せず。

（『文論』第五篇）[9]

春台は、古典の言葉を模擬すること自体は承認するが、それらを拾い集めて「今法」に従って綴り合わせることを批判する。「法」については、『左伝』と『史記』との用語の違いや文体の特徴について指摘した上で、

左氏之文自一法、前無古人。司馬之文亦自一法。

左氏の文は自ら一法にして、前に古人無し。司馬の文も亦た自ら一法なり。

（『文論』第六篇）

と述べている。ここでの「法」とは、左丘明や司馬遷それぞれに固有の作文スタイルとも言うべきものであろう。しかし、明の古文辞派は古人がその言葉を用いた「所以」を検討することがないため、辞は典雅であっても「文理 属せず」と述べる。一方、理想的な文章としては、

故善属辞者、取諸古人、而出諸己口、令読者不覚其為古辞。此以其文理条貫、有倫有要故也。

故に善く辞を属する者は、これを古人に取りて、これを己れの口より出だし、読む者をして其の古辞為ることを覚えざらしむ。此れ 其の文理 条貫して、倫 有り 要 有るが故を以てなり。

（『文論』第二篇）

と、古典の言葉を取りながらも、自分の言葉として使用し、「古辞」であることを感じさせないものである、としている。そして、それは「文理」が一貫していて、筋道（「倫」）があり要点（「要」）が押さえられていることによるものである、と述べる。[10]

また、文章制作を機織りに喩えて、次のように言う。

今有美錦於此。使工人擬織之。但得其法、而精麤同等、文采相若、則黼黻易処、更玄為黄、何不可之有。此以其機杼由己、文章位置得所、而条理不紊故也。

今 此に美錦有り。工人をして擬してこれを織らしめん。但だ其の法を得て、而して精麤同等、文采相ひ若かば、則ち黼黻 処を易へ、玄を更めて黄と為すも、何の不可なることかこれ有らん。此れ其の機杼 己れに由り、文章の位置 所を得て、条理 紊れざる故を以てなり。

（『文論』第二篇）

手本とした「美錦」の織り方（「法」）を自分のものとした上で、精粗や華やかさが同程度であれば、紋様（「黼黻」）や彩色（「玄」・「黄」）が変わっても、何の問題もない。なぜならば、工人自身が主体性を持って織ることで、紋様（「文章」）は適切な配置となり、織目の脈絡や秩序（「条理」）が乱れないためである。

以上のような発言から見れば、春台の「文理」とは、一篇の文章を貫く「条理」すなわち統一性や整合性と言えよう。そして、それは言葉の用い方を始めとする古典の作文スタイル（「法」）を我が物とした上で、自分の言葉として語ることによって獲得できるもの、と考えられる。

ところで、上述のような古文辞派に対する批判は、台州にも見ることができる。

蓋昌黎之文所以傑出乎千古者、以其能置身於三代両漢之間、而与古為徒也。其務去陳言者、恥与古人雷同也。而其文自己肺腑中流出。其気渾然、絶無弥縫之痕。

蓋し昌黎（韓愈）の文 千古に傑出する所以の者は、其の能く身を三代両漢の間に置きて、古と徒為るを以てなり。其の務めて陳言を去る者は、古人と雷同せんことを恥ぢてなり。而して其の文 己れの肺腑中より流出す。其の気 渾然として、絶えて弥縫の痕無し。

（『文章緒論』）

台州は、韓愈の文章が優れている理由を古人と一体化している点にあるとし、また彼が陳腐な言葉を使用しないの

は古人との附和雷同を恥じるためである、と述べる。[11] そして、その文章は韓愈自身の「肺腑中」から出たものであって、破綻しているところは皆無である、と評価する。春台も「善く辞を属する者は、これを古人に取りて、これを己れの口より出だ」すと述べており、自分の言葉として語ることを是としていたが、台州もその方向から韓愈の文章を評価している。ここでは直接的に「文理」に言及していないが、次の李攀竜（一五一四～一五七〇）に対する批判へと繋がってゆくことからすれば、やはり「文理」が意識されていると見てよいであろう。

滄溟則反之矣。好剽窃古言、行之以己法。而其文為辞之所使。其気索然、斧鑿之跡、不可掩焉。故初学之士、欲自滄溟入、則有終身学之而不能成文理者。

滄溟（李攀竜）は則ちこれに反するなり。好んで古言を剽窃して、これを行ふに己れの法を以てす。而して其の文辞の使ふ所と為る。其の気索然として、斧鑿の跡、掩ふべからず。故に初学の士、滄溟より入らんと欲すれば、則ち終身これを学べども而も文理を成すこと能はざる者有り。（『文章緒論』）

「滄溟」は李攀竜の号である。彼は所謂「後七子」のひとりであり、明の古文辞派の領袖である。台州は、彼を「古言を剽窃」して「己れの法」によって作文するものと捉え、その文章は措辞のための措辞に堕し、不自然な技巧の痕跡を露呈していると厳しく批判する。そして、李攀竜に学ぶ限り、「文理」は終生得られないとする。

古典の「法」ではなく、「今法」あるいは「己れの法」による「古人の成語」「古言」の利用を批判する点で、春台・台州ともに、ほぼ同じ趣旨の発言と言えよう。

台州は、古文辞派とは対照的に、自身の言葉を綴った韓愈に学ぶことを推奨しているのであるが、その理由は、韓愈の文章が「己れの肺腑中より流出」したものであって、「其の気渾然として、絶えて弥縫の痕無し」という統一性・整合性を備えているためである。これは、春台の「文理」を踏襲した考え方であるように思われる。

しかし、古文辞派を批判しているとはいえ、台州も古典の言葉を取り入れる「修辞」を軽んじているわけではない。

雖修辞於古、不取法於古、則不能得文理矣。雖修辞於古、取法於古、辞不純、法不粋、則亦未為得矣。

辞を古に修すと雖も、法を古に取らざれば、則ち文理を得ること能はず。辞を古に修し、法を古に取ると雖も、辞純ならず、法粋ならざれば、則ち亦た未だ得るを為さず。（『白雲館文罫』附録）

ここでは、「辞」のみならず「法」をも「古」より取ること、その両者を洗練させることが「文理」の獲得に繋がる、としている。これは、「是徒知古其辞、而忘古其法也（是れ徒に其の辞を古にするを知りて、其の法を古にするを忘

るるなり）」（『文論』第六篇）と、「法」を「古」にすることを重んじる春台の延長線上にあるものである。

また、「三子紀事序」においては、「文理」の獲得に加えて、「修辞」の重要性も説かれている。

凡作文之法、欲先得文理。文理既得、始可成篇。篇既成、始可論巧拙。譬諸布帛之経緯既立、始可成匹。匹既成、始可論精麤也。

凡そ作文の法、先づ文理を得んと欲す。文理 既に得て、始めて篇を成すべし。篇 既に成りて、始めて巧拙を論ずべし。これを布帛の経緯 既に立ちて、始めて匹を成し、匹 既に成りて、始めて精麤を論ずべきに譬ふ。（「三子紀事序」）

ここでは、一篇の文章が一匹の布帛に、文章の巧拙が布帛の精粗に喩えられている。ここでの「文理」は、「経緯」すなわち布帛の縦糸と横糸との交錯に相当する。そして「修辞」とは、その糸を選ぶことであるという。

夫修辞、譬則択糸也。辞不修、何以得佳篇。糸不択、何以成美錦。

夫れ辞を修するは、譬ふれば則ち糸を択ぶなり。辞 修せずんば、何を以てか佳篇を得ん。糸 択ばずんば、何を以てか美錦を成さん。（「三子紀事序」）

「美錦」を織るための糸とは、経典や諸子百家をはじめとする古典に他ならない。

今也諸子之文、文理既得、過此以往、以六芸為経、以百家為緯、修辞以成佳篇乎、天孫七襄之妙、豈不可庶幾乎。

今也諸子の文、文理 既に得れば、此れを過ぎて以往、六芸を以て経と為し、百家を以て緯と為し、辞を修して以て佳篇を成さんか、天孫七襄の妙、豈に庶幾すべからずや。（「三子紀事序」）

ここでの「六芸」は、経典（六経）の意である。「天孫七襄」とは、織女の織った美しい布を指す。[12]台州は、「文理」を得た上で、経典や諸子の言葉を縦糸や横糸に用いて文章を織りなしてゆけば、織女の布のような美しい文章も夢ではない、と述べる。

この発言は、春台の機織りの比喩との類似を思わせる。ここで言う「経緯既立」とは、縦糸と横糸とが秩序立てて織られてゆくことであるが、それは春台の言う「条理不紊（条理 紊れず）」とほぼ同義と考えて良いであろう。このような比喩から見ても、台州の言う「文理」は、やはり春台の「文理」を踏襲したものと思われる。

以上のように見てくると、台州の文章論が春台のそれを継承するものであることは明らかである。[13]台州の言う「文理」もまた古典の作文スタイル（「法」）に範を取りながら、あくまでも自身の文章として統一性や整合性を持たせることを意味する。そして、その上に立って適切な用語の選択

（修辞＝択糸）がなされることが、理想的な文章を制作する方法である、と台州は言う。[14]

ところで、ひとくちに統一性・整合性と言っても、様々な形が想定される。例えば、論理的に筋道が通っていることもそのひとつであろうが、『含餳紀事』所収の童話は必ずしも論理的文章というわけではない。そこで次節では、各話の「修辞」に着目しながら、それらが文章の中においてどのような形で統一性・整合性を示しているか、について見てみようと思う。

四、『含餳紀事』における「修辞」

前節で見てきたように、台州も古典の言葉を取り入れた「修辞」は認めているが、それはあくまでも文章の統一性・整合性の上になされるべきものであるとしていた。ところで、『含餳紀事』のうち特に「紀蟹猿事」「紀桃奴事」においては、古典の表現を取り入れることによって独特の精彩を放っているところがある。筆者はこの点に注目した。

例えば、次に挙げるのは、「紀蟹猿事」の冒頭、柿の実を取ることができないことを猿に語る蟹の言葉である。

今也幸而実矣。吾将採而食之、而余体不便登陟。欲罷不能、既竭吾才。卓爾朱実、仰之弥高。

今也幸ひにして実る。吾れ将に採りてこれを食はんとするも、余が体登陟に便ならず。罷めんと欲して能はず、既に吾が才を竭す。卓爾たる朱実、これを仰げば弥いよ高し。

ここには、次の『論語』の言葉が巧みに配されている。

顔淵喟然嘆曰、「仰之弥高、鑽之弥堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然、善誘人。博我以文、約我以礼。欲罷不能、既竭吾才。如有所立卓爾。雖欲従之、末由也已」。

顔淵喟然として嘆じて曰はく、「これを仰げば弥いよ高く、これを鑽れば弥いよ堅し。これを瞻れば前に在り、忽焉として後に在り。夫子循循然として、善く人を誘ふ。我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす。罷めんと欲して能はず、既に吾が才を竭す。立つ所有りて卓爾たるが如し。これに従はんと欲すと雖も、由る末きのみ」と。

（『論語』子罕篇）

師を仰ぎ見れば、師はますます高いところにいる（「これを仰げば弥いよ高く」）。その教えにひきこまれてしまって、やめようと思ってもやめられず、自分の才能が尽きるところまで頑張ってきた（「罷めんと欲して能はず、既に吾が才を竭す」）。しかし、師はさらに新しい教えを立てて、それを高々と示しているようにみえる（「卓爾たるが如し」）。

これは、顔淵が師の孔子について語った言葉であって、そこには孔子に対する尊敬の強さとともに、その高さを眼

前にしてため息を洩らす弟子の姿が描かれている。

「紀蟹猿事」では、この『論語』の言葉が利用されることによって、孔子を見上げる顔淵の姿と、柿の実を見上げる蟹の姿とが二重写しとなっている。言わば、孔子が柿に代わってしまったわけであり、その落差が一種のユーモアを生み出しているのである。

次に、蟹が仲間たちに作戦を授ける場面を見てみよう。

公子乃得石之似壇者而登之、左揚鉞、右張鋏、而命六物曰、「咨、六事之人。吾知鍼生之善刺也。汝其伏于胡孫之牀下。吾知鶏卵丈人之善得火而蜚騰也。汝其伏于胡孫之炉。……」

公子 乃ち石の壇に似たる者を得てこれに登り、左に鉞を揚げ、右に鋏を張りて、六物に命じて曰はく、「咨（ああ）、六事の人。吾れ鍼生の善く刺すことを知れり。汝 其れ胡孫の牀下に伏せよ。吾れ鶏卵丈人の善く火を得て蜚騰することを知れり。汝 其れ胡孫の炉に伏せよ。……」

ここには、『書経』に倣った表現が散見される。

時甲子昧爽、王朝至于商郊牧野、乃誓。王左杖黄鉞、右秉白旄、以麾曰……。

時に甲子の昧爽に、王 朝（あした）に商郊の牧野に至り、乃ち誓ふ。王 左に黄鉞を杖つき、右に白旄を秉（と）り、以て麾（さしまね）きて曰はく……。（牧誓）

周の武王は殷の紂王を討つべく、甲子の日の未明に殷の郊外の牧野にやってきた。この時に武王は左手に鉞を持ち、右手に采配を持って軍勢の前に臨んだという。

蟹が左手に鉞を、右手に鋏を持って登壇した姿は、牧野の戦いを前にした周の武王がイメージされているのである。また、「六事の人」は、次の文章を踏まえたものであろう。

大戦于甘。乃召六卿。王曰、「嗟、六事之人。予誓告汝。……」

大いに甘に戦はんとす。乃ち六卿を召す。王 曰はく、「嗟（ああ）、六事の人。予（わ）れ 汝に誓告せん。……」（甘誓）

これは、夏王が甘水の戦いに臨んで、六卿（六将軍）に呼びかけた言葉である。蟹の仲間も「鍼生」「鶏卵丈人」「軟糞学士」「棒処士」「杵丈夫」「臼力士」の六名であって、「六事の人」という語は見事に符合している。

なお、「咨」字も「嗟」字と同様に、「帝曰、『咨、汝羲暨和』（帝 曰はく、『咨（ああ）、汝 羲暨（およ）び和』）」（堯典）をはじめとして、王の発言の冒頭に置かれる嗟嘆の詞である。また、「汝云々」と呼びかけて命令を下してゆくことも、『書経』中によく見られる言い方である。してみれば、台州が蟹を『書経』の中の諸王と二重写しに描こうとしていることは明らかである。

「紀蟹猿事」は、猿への報復を終えた「無腸公子（蟹）」

が、「横行介士」を自称して「長横行乎渓澗泉石之間（長く渓澗泉石の間に横行す）」という形で団円となる一種の成長譚・変身譚である。なお、底本では「横行介士」について「ヨコアリキノヨロヒムシヤ」との傍訓がある。「横行」には、蟹が横歩きをすることと、気ままに闊歩することとが掛けられているであろう。このように、小さな蟹を威張っている鎧武者に見立てるところに面白さがあるのであって、そうした落差がこの話の核となっている。『書経』における太古の聖王や『論語』における孔子の高弟顔淵を二重写しにして落差を強調することは、そうした物語の性格を浮き彫りにする言葉の用い方であるように思われる。

「紀桃奴事」も超人的な能力を持つ鬼と桃太郎との角逐の物語であって、言葉の用い方もそれに合わせた工夫が認められる。

鬼王聞之、投袂而起。履及於窒皇、剣及於寝門之外、車及於城東之市。

鬼王 これを聞き、袂を投じて起つ。履（くつ）窒皇に及び、剣 寝門の外に及び、車 城東の市に及ぶ。

桃太郎が鬼の財宝を盗んで逃げたことを知った鬼王がこれを追って飛び出すと、くつは宮殿の廊下で追いつき、剣は宮殿の門外で追いつき、車は城東の市場で追いついた、という。もちろん、くつや剣、車がひとりでに動くことはあり得ない。したがって、これは桃太郎の脱出を知った鬼王の行動がいかに素早かったかを鮮烈に描く誇張である。この表現は、『春秋左氏伝』宣公十四年の記事に基づくものである。楚の臣である申舟が宋に殺されると聞くやいなや、出兵の口実を得た楚の荘王（楚子）はただちに宋に攻め込んだ。

楚子聞之、投袂而起。履及於窒皇、剣及於寝門之外、車及於蒲胥之市。

楚子 これを聞き、袂を投げて起つ。履 窒皇に及び、剣 寝門の外に及び、車 蒲胥の市に及ぶ。

しかし、荘王と鬼王とでは、特に何らかの落差が生じているようには思われない。したがって、この場合は「紀蟹猿事」のような二重写しの効果を狙ったものではなく、鬼王の狼狽や怒りを表すために『左伝』の誇張表現を流用したものと言えよう。

他にも、逃げる桃太郎の船を補足するために、鬼たちに海水を吸わせる場面では、次のように言う。

諸鬼受命吸海水、猶長鯨之吸百川也。於是海水為涸、桃奴船為膠矣。

諸鬼 命を受けて海水を吸ふこと、猶ほ長鯨の百川を吸ふがごとし。是に於て海水 為（ため）に涸れ、桃奴の船 為（ため）に膠す。

ここでは、杜甫「飲中八仙歌」（『杜詩詳注』巻二）の次の句が襲用されている。

左相日興費万銭　　左相は日興に万銭を費し
飲如長鯨吸百川　　飲むこと長鯨の百川を吸ふが如し

「左相」とは、唐の太宗の後裔に当たる李適之のことである。彼は日々の遊興に大金を費やし、酒を飲むことは巨鯨があらゆる川の水を飲み干すかのようである、と詠われている。これも誇張であるが、海水が干上がるほどの量を飲んだ鬼たちの異能を形容するものとして相応しい。

さらに、桃太郎は五歳にして「力能扛鼎（力 能く鼎を扛ぐ）」と称されているが、言うまでも無く、これは項羽の「力能扛鼎、才気過人（力能く鼎を扛げ、才気 人に過ぐ）」（『史記』項羽本紀）に基づく誇張表現である。

そもそも「紀桃奴事」は、鬼と桃太郎との超人的な力比べや知恵比べという奇想天外な場面の連続であり、古典から誇張表現を流用することは、そのような物語の性格を際立たせる一翼を担っている。

以上の事例からは、物語の性格を勘案した上で好適な古典の言葉を取り入れ、同時にそのような言葉によって、人物の言動やイメージを精彩あるものにしようとする意識が看取される。台州は、このような形で物語と「修辞」との間に統一性・整合性を持たせようとしていると考えられる。

ところで、『含餳紀事』には、以上のような事例とはまた異なる形で、古典の表現を取り入れたと思われる点がある。それは、特に「紀二翁事」に顕著であるように見受けられる。次に、この点に触れておきたい。

台州は、『文章緒論』の中で司馬遷と班固とを比較して、「司馬遷蔓辞累句常多、班固洗削殆尽（司馬遷は蔓辞累句常に多く、班固は洗削して殆ど尽く）」と言う。「蔓辞累句」とは美辞麗句や冗漫な文句の意であり、一見すると司馬遷に対する批判と思われるのであるが、実はそうではない。彼は『史記』及び『漢書』の「衛青伝」を例に挙げ、司馬遷『史記』の記述を肯定的に評価する。

校尉李朔、校尉趙不虞、校尉公孫戎奴、各三従大将軍獲王、以千三百戸封朔為渉軹侯、以千三百戸封不虞為随成侯、以千三百戸封戎奴為従平侯。
（『史記』衛青列伝）

校尉李朔、趙不虞、公孫戎奴、各三従大将軍獲王、封朔為陟軹侯、不虞為随成侯、戎奴為従平侯。
（『漢書』衛青伝）

今、訓読は省略し、『史記』本文のうち『漢書』で省略されている文字に傍点を附して示した。もちろん、『漢書』のように反復を避けた記述でも、充分に文意は通じる。しかし、台州は「比史記五十八字中、省二十一字。然終不若史記之鄭重可喜也（史記に比ぶるに五十八字中、二十一字を省けり。然も終に史記の鄭重 喜ぶべきに若かず）」として、反復を避けない『史記』の「鄭重」を評価したのである。

『含餳紀事』を振り返ってみると、反復によって場面展開させる記述は少なくないが、特に「紀二翁事」がほぼ全篇に渉って反復で成り立っていることに思いあたる。[15] 物語の冒頭、犬が翁を導いて山へ向かう場面から、過剰とも思われるほどに反復した記述が繰り返される。しかし、考えてみれば「紀二翁事」は、善玉の西翁の行動を悪玉の東翁がトレースすることによって展開してゆく物語である。反復もまた、物語の性格を踏まえた表現である可能性が考えられる。ここで次の二文を見比べてみよう。まずは、犬が殺されたことを告げられる場面である。

東翁告以殺之。西翁聞之而懊憹者久之而無慍色。因問其屍所在。東翁曰、「屍在某処」。西翁迺入山求其屍、掘地而瘞之、栽松於其上而帰。

東翁 告ぐるにこれを殺すことを以てす。西翁これを聞きて懊憹することこれを久しくす。而して慍む色無し。因りて其の屍の在る所を問ふ。東翁 曰はく、「屍は某処に在り」と。西翁 迺ち山に入りて其の屍を求め、地を掘りてこれを瘞み、松を其の上に裁えて帰る。

次は、臼が燃やされたことを告げられる場面である。

東翁告以析而薪之。西翁聞之又懊憹者久之而無慍色。因問曰、「其灰安在」。曰、「寘之于廁」。西翁迺如廁尽収其灰、愈益懊憹而帰。

東翁 告ぐるに析きてこれを薪にすることを以てす。西翁これを聞きて又た懊憹することこれを久しくす。而も亦た慍む色無し。因りて問ひて曰はく、「其の灰 安にか在る」と。曰はく、「これを廁に寘けり」と。西翁 迺ち廁に如きて尽ごとく其の灰を収め、愈いよ益ます懊憹して帰る。

右の記述では、「東翁告以～」「西翁聞之而（又）懊憹者久之而無慍色」「西翁迺～而帰」と、ほぼ同じ構造の文の繰り返しとなっている。このような反復には、差異を強調する表現効果がある。前者では犬を殺されたことを知った西翁が「懊憹（残念がる）」したことを言うが、その後は特に心情に触れることはなく、犬の亡骸を埋めて松を植えたという西翁の行動のみが記述される。ところが、後者では臼を薪にされたことを聞いた時に加えて、厠に置かれた灰を回収した際にも「愈いよ益ます懊憹」して帰った、と再び「懊憹」したことを加えている。これが西翁の悲しみの深まりを描こうとしてものであることは、想像に難くない。確かに過度な反復は冗長とも言えるが、『史記』における「蔓辞累句」を肯定的に捉えた台州は、このような形で西翁の心情を丁寧に描写しようとしたのである。

このことは、次の例にも言えるであろう。臼を借りようとした東翁に対して、西翁は犬を殺されたことを理由に断ろうとするのであるが、「東翁不聴。遂仮之而帰（東翁 聴

かず。遂にこれを仮りて帰る)」と、東翁は拒絶をものともせずに臼を借りて帰る。事態が自然に推移することを表す助字「遂」が用いられていることからすれば、西翁の拒絶はさほど強いものではなかったことが窺われる。ところが、その後に灰を借りようとする場面では、「東翁不聴。強乞其灰而去(東翁 聴かず。強ひて其の灰を乞ひて去る)」と、強引に持ち去るようになっている。これは、西翁の拒絶が強まったことを意味する。実際、西翁が語った拒絶の理由には、犬を殺されたことの他に、臼を燃やされたことが加えられている。しかも、それは「恐亦不利於君也(恐らくは亦た君に利あらざらんことを)」という、東翁への心配から出た言葉なのである。

他の二話と異なり、「紀二翁事」には、どこか陰惨さがつきまとう。東翁は身勝手かつ残酷な行動を繰り返し、またその度に応報を受けるのであるが、西翁もまたその度に悲しみを深めてゆく。そのような心情の機微を描くところに、他の二話にはない「紀二翁事」の特徴がある。この事例は、古典の言葉を用いる形での「修辞」とは言い難いが、台州の司馬遷に対する評価を見る限り、これもまた物語の性格に合わせて古典の「鄭重」を取り入れようとする試みであったように思われる。

五、おわりに

以上、台州の「文理」や「修辞」という語を中心に彼の文章論を明らかにした上で、『含餳紀事』にそれらがどのように反映されているかについて確認してきた。その結果として、台州の文章論が春台のそれを踏襲するものであることや、『含餳紀事』所収の物語にはそれぞれの性格に即した古典の表現が取り入れられていることを明らかにした。そのような文章制作のあり方は、確かに古文辞派とは一線を画するものと言えよう。また、童話に取材した漢文戯作とされる『含餳紀事』が実は作文教育を意識したものであったことについても、そこに台州の文章論の反映を見いだしたことによって、本文そのものから説明がつけられるようになった。春台から継承した古文辞派批判を具現化したものとして、またそれに基づく作文教育のあり方を示すものとして、『含餳紀事』の持つ価値は大きい。

注

(1) 台州の交流関係については、高橋章則「蘐園古文辞学と揚雄―熊阪台州・大田南畝を端緒として―」(『文芸研究』141号、一九九六年)、同氏「奥州熊阪台州・盤谷の著作出版と交遊―近世後期の文壇と東北―」(『文芸研究』143号、一九九七年)、徳田武「『吾妻鏡補』と熊阪台州・盤谷」(上『明治

大学教養論集』377号、二〇〇四年一月、下『明治大学教養論集』383号、二〇〇四年三月）を参照。

（2）本稿では、高橋昌彦解説『昔昔春秋・含餳紀事』（一九九八年、太平書屋。寛政四年〔一七九二年〕須原屋伊八刊本影印）を底本とした。なお、本稿の訓読は基本的に底本の訓点に従うが、現在の訓読の習慣に従って適宜改めたところがある。他の引用文献についても同様である。

（3）『含餳紀事』については、小野美花「桃太郎―熊阪台州先生著作研究『含餳紀事』」（福島大学教育学部国語学国文学会『言文』39号、一九九二年）、内ヶ崎有里子「江戸漢文戯作『含餳紀事』の『紀桃奴事』について」（東京学芸大学国語国文学会『学芸国語国文学』26号、一九九四年）、大久保隆郎「台州の『紀桃奴事』について」（福島大学教育学部国語学国文学会『言文』47号、一九九九年）、注（2）前掲書の高橋氏「解説」を参照。

（4）新潟大学附属図書館 佐野文庫蔵 天明八年（一七八八年）崇文堂前川六左衛門刊本を利用した。

（5）東京大学東洋文化研究所図書室 倉石文庫蔵 享和元年（一八〇一年）風月堂長谷川孫助刊本を利用した。

（6）岡山大学附属図書館蔵 明和三年（一七六六年）須原屋市兵衛本を利用した。カタカナをひらがなに改め、適宜濁点を加えた。

（7）さらに遡れば、明末に日本に渡来した陳元贇『昇庵詩話』を典拠とする術語である。このことについては、小野泰央「荻生徂徠の詩文論と陳元贇『昇庵詩話』―「古文辞」学の出発点として―」（『和漢比較文学』57号、二〇一六年）を参照。

（8）春台の文章論については、白石真子「太宰春台『文論』訓釈」（『漢文学解釈与研究』1号、一九九八年）、同氏「太宰春台『文論』考」（『上智大学国文学論集』32号、一九九九年。のち『太宰春台の詩文論 徂徠学の継承と転回』二〇一二年、笠間書院）、揖斐高「擬古論―徂徠・春台・南郭における摸擬と変化―」（『日本漢文学研究』4号、二〇〇九年）を参照。

（9）岡山大学附属図書館 小野文庫蔵『詩論』一巻合刻 寛延元年（一七四八年）刊、安永二年（一七七三年）渋川与左衛門ほか新刻本を利用した。

（10）「倫」「要」は『書経』呂刑「刑罰世軽世重。惟斉非斉、有倫有要（刑罰は世によつて軽く世によつて重し。惟（あるい）は斉に非斉に、倫有り要有り）」を踏まえる。世の情勢によって刑罰に違いがあるとしても、筋道や要点は押さえられていることを述べたもの。

（11）春台も韓愈を推賞して、次のように言う。

吾謂、後子長而能行古法者、其唯退之乎。其去陳言、不必古也。其為新辞而行之以古法、能古也。

吾れ謂ふ、子長（司馬遷）より後にして能く古法を行ふ者は、其れ唯だ退之（韓愈）のみか、と。其の陳言を去るは古を必とせざるなり。其の新辞を為（つく）りてこれを行

ふに古法を以てするは、能く古なるなり。

（『文論』第六篇）

韓愈自身の「新辞」によっても「古」たりうるとして、「古法」の重要性を説く。春台の韓愈評価については、白石氏前掲書 第二部 第七章（230～233頁）を参照。

(12) 『詩経』小雅「大東」「跂彼織女、終日七襄（跂たる彼の織女、終日 七襄す）」を踏まえる。

(13) 台州が師事した松崎観海は、春台の門人である。春台への傾倒は、観海の影響である可能性が考えられる。

(14) 台州の「文理」への言及は他にもあるが、紙幅の都合上、省略する。

(15) 『含餳紀事』全体では、記述の省略が全くないわけではない。例えば「紀桃奴事」において、「雄雉」が黍団子をもらう場面では応対の会話を描いているが、「蒼狗」「白猿」は会話が省略されている。このことからすれば、台州は反復と省略とを意図的に使い分けていると考えられる。

【謝辞】貴重な所蔵資料を利用させてくださった新潟大学附属図書館・東京大学東洋文化研究所図書室・岡山大学附属図書館に感謝します。

（本学研究科・学部　教員）